

## 中欧 2013 年夏

渡辺 肇

倉敷芸術科学大学産業科学技術学部

(2013年10月1日 受理)

### 1) 国境を越える交流

今年の5月未知の人から突然メールが入ってきた。自己紹介としてマニラ駐在のオーストリア外交官で、ヴィルヘルム・ドンコと言う者だと言ってきた。『極東に於けるオーストリア海軍』という書籍をベルリンで発行したばかりだと言う。その中で拙著『オーストリア《皇太子》の日本訪問』を1ページかけて紹介してくれているのだと言う。電子版の著書はメールに添付して送付してきた。



図1. ドンコ大使と著者

ウィーンの歴史学教授アイヘルブルク氏の紹介だと言う。海外の未知の人が拙著を評価してくれた事は本当に嬉しかった。

更によく聞いてみると、本人はマニラ駐在のオーストリア大使で、その前には韓国駐在大使も務めた方だと言う。また、文部省給付学生として東京大学に留学しているとの事だった。

フランツ・フェルディナント「皇太子」の日本訪問の際の御召艦 カイゼリン・エリーザベト号が1914年ドイツ領だった青島で、日独戦役に巻き込まれ、日本軍に包囲され沈没した件につき、原資料を調べて欲しいとの依頼を受けた。防衛省戦史室や国会図書館で原資料を捜索し、この件に関する有益な資料を発見し、送付してあげた。

夏にはウィーンに帰国するとの事だった。小生も欧州出張が決まっていたので、ウィーンで会おうと言う事になった。メールの交換は10回以上したが、電話でも話した事がない人と会うのは愉快だと思った。ウィーンで高名の喫茶店カフェー・ツェントラールで会う事ができ、2時間近く情報交換をした。代金はドンコ氏が払ってくれた。印刷版著書も

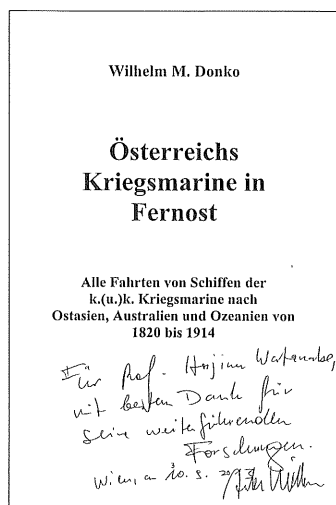


図2. ドンコ氏の献辞付きの著書

贈呈してくれて、献辞も書いてくれた。

昨夏知り合ったペーター・パンツァー教授とも会う事

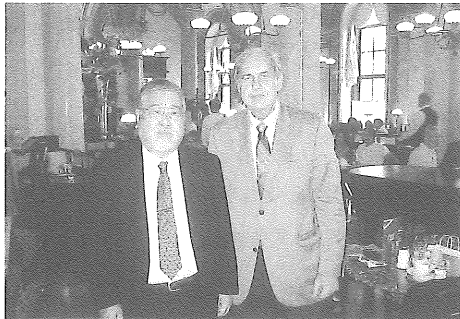


図3. パンツァー教授と筆者

ができ、素晴らしい写真を提供してもらった。また有益な御話をさせていただいた。これらは『オーストリア《皇太子》の日本訪問』の第2版に使用させていただく予定だ。昨年の講演を纏めた著書も頂戴し、献辞も書いてもらった。

### 2) ベルリンの路面電車

1989年にはベルリンの壁が崩壊し、1990年には東独が西独に吸収され、東西ベルリンも統一された。その後の東ベルリンの路面電車はどうなったのだろうか。西ベルリンと同様に撤去されてしまったのであろうか。そうではない。撤去どころか路線が延長されて西ベルリンにまで進出してしまっているのだ。

サッカーのワールド・カップが2006年に開催された。それを契機にしてベルリンに中央駅が建設された。中央駅には国電と地下鉄がつながっているが、この地下鉄路線は新設でごく短く、数年後にベルリンの華麗な大通り、ウンター・デン・リンデンを経由してアレクサンダー広場駅に繋がるまでは中央駅までのアクセスは若干不便だ。バス路線で補っているものの十分とは言えない。この西ベルリン側にある中央駅にまで東ベルリンの路面電車を延長する工事が始まっている。中央駅の前には既に線路が敷設されているが、完成

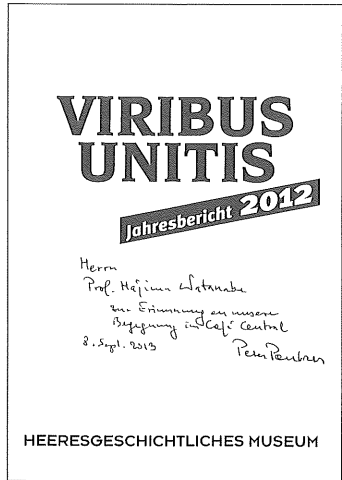


図4. パンツァー教授の献辞つき著書



図5. 中央駅前に敷設された路面電車のレール

**Chaos streng nach Plan**  
Auf der Invalidenstraße wird noch bis Sommer 2013 gebaut. Schneller geht es nicht, sagen die Experten

VON PETER HERRMANN  
Die Invalidenstraße ist die Herzens-Sperre gegen die Fahrpläne im sechsten Berliner Stadtteil. Spätestens ab Ende März wird es hier ein wenig anders aussehen. Denn dort, wo sich über eine lange Strecke quer durch den Ort die Gleise des U-Bahnsystems befinden, sollen nun Straßenbahnlinien verlaufen. Ein Jahr lang, bis Ende März, werden die Gleise für den Bau der Straßenbahnlinie genutzt. Die Gleise werden abgebaut und die Straßenbahnlinie wird bis zum Sommer 2013 fertiggestellt. Die Invalidenstraße wird dann wieder für den Straßenbahnverkehr freigegeben. Die Gleise werden abgebaut und die Straßenbahnlinie wird bis zum Sommer 2013 fertiggestellt. Die Invalidenstraße wird dann wieder für den Straßenbahnverkehr freigegeben.

Die Gleise werden abgebaut und die Straßenbahnlinie wird bis zum Sommer 2013 fertiggestellt. Die Invalidenstraße wird dann wieder für den Straßenbahnverkehr freigegeben.

図6. 路面電車延伸工事を報ずる新聞記事

するのは2年先だという事だ。地元には工事に伴う交通規制に対する不満の声も高いが、大都市の環境保全に路面電車は理想的ではないかと思う。東京でも中央区が路面電車の復活を検討中だ。

### 3) オーデル・ナイセ線 (シュチェチン)

ドイツは第2次世界大戦に敗北した結果、国土の東部を失った。西部ドイツは米英仏軍に占領され、1949年には西独 (BRD) となる。中部ドイツはソ連軍に占領され、同じく1949年には東独 (DDR) となった。東部ドイツはポーランド領とソ連領に分割された。

東部ドイツはドイツ民族が数百年かけて入植・開拓した土地である。そのような土地から住民を追出して他国の領土とするのは一般的にはありえない。例えてみればアメリカ合衆国から白人や黒人を追出して原住民たるインディアンの国にする様なものである。そんな乱暴な事ができた原因はスターリンとヒトラーのせいである。

1871年に成立したドイツ帝国は1918年には第一次世界大戦で敗北し崩壊した、1919年のヴェルサイユ条約により、東西国境において若干の領土を喪失した。英米仏の連合国は戦争に敗れたドイツと革命に揺れるロシアから領土を取上げ18世紀に普露澳の三国により分割され消滅していたポーランドを復活させようとした。東部ドイツの西プロイセン州やシュレジエン州はポーランド領となった。ロシアのベラルシアやウクライナの一部もポーランド領となった。この旧ロシア領においてはポーランド人貴族が領地を所有し、その配下の農民たちはベラルシア人やウクライナ人という構成であった。1919年12月連合国最高会議はポーランド・ロシア国境をカーゾン英外相提案により決定した。それをカーゾン線とよぶ。しかし東に進出しようとするポーランド軍はカーゾン線を越えて東方に進撃し、それに対抗するロシア赤軍との間に戦争があり、1920年にはポーランド軍が最終的に勝利し領土を東に拡大した。

スターリンはこの喪失領土の回復を願っていた。1939年になると同じく喪失領土の回復を願っていたヒトラーと独ソ不可侵条約を結び、その秘密協定によりポーランドを東西から攻める事を決めた。1939年9月1日にドイツ軍がポーランド西部国境から進撃するとソ連軍は東部国境から進撃し、カーゾン線に達した。ポーランドの全領土が独ソに分割されてしまった。

この独ソも1941年6月22日にバルバロッサ作戦が発動され、ドイツ軍はソ連領深く進撃する。独ソ戦は1945年5月8日まで続く。初期はスターリンの油断によりソ連軍は苦戦するが、1941年末のアメリカ参戦により大量の兵器等の支援を受け、1943年初頭のスターリングラード戦の勝利により、西に向かって進撃し、最終的にはドイツの首都ベルリンを占領し、ヒトラーを自殺に追い込み第2次世界大戦に勝利するのである。

1945年7月17日から8月2日までベルリン西郊ポツダムで米国のツルーマン、ソ連のスターリン、英国のチャーチル (途中で総選挙敗北によりアトリーに交代) が会談し対日

本の降伏条件と欧州の戦後秩序を決めたのである。スターリンは1939年に獲得した旧ポーランド領を返還する事など考えなかった。1943年末のテヘラン会議でスターリンはルーズベルト米大統領とチャーチル英首相にカーゾン・ラインをポーランドの東部国境する事を既に認めさせていたからだ。東部国境が大幅に西に移動し、領土が狭隘となったポーランドには西部国境を大幅に西に移動させる事で了承させようとしたからである。しかし、そこは無人地帯ではなかった。数百年にわたってドイツ人が居住してきた土地なのである。スターリンは無法にもこれらドイツ人居住者を西に追放し、その土地をポーランド人に与えたのである。ポーランドは東部で18万Km<sup>2</sup>をソ連に譲り、その代わりに10.3万Km<sup>2</sup>の旧ドイツ領を獲得したのである。

ドイツ中部に流れるオーデル川(ドイツ語の実際の発音はOder オーダー、ポーランド語ではOdra オドラ)とその支流ナイセ川(Neisse、ポーランド語ではNysa Luzika ニサウジツカ)が突然ポーランドとドイツの国境になってしまったのである。左岸はドイツ領、右岸はポーランド領である。

今回この国境地帯を訪問してみた。まず訪れたのはポーランド語でシュチェチン(Szczecin)という都市である。(日本語ではドイツ語でシュテッティン Stettin と呼ぶが、ドイツ語の実際の発音はシュテティーン)この都市はオーデル河口の西にあって本来ならドイツ領かとも思えるのであるが、何故かポーランド領である。戦前は有名な造船所があってドイツ海軍の軍艦や潜水艦の建造で有名であった。ベルリンの中心部にあるフリードリッヒ・シュウトラーセ駅の大鉄傘もここで製造されている。ベルリンからの距離は160km程で自動車で行けば1時間と少しで到達できるだろう。

小生は鉄道で行った。ローカル線の乗継ではあるが、それでも2時間程度で到着した。駅舎の設備は旧東独の駅舎と比べてもかなり遅れていた。この都市からドイツ領までは10分も掛からないのに、ドイツ語が殆ど通用しなかった。市電、市バスの一乗車券を買って街の隅々を見学した。ドイツの古い家並が結構残っていたが、これらの殆どは戦後に再建されたものだ。というのは、終戦前のソ連赤軍とドイツ国防軍の戦闘で都心部は100%破壊されてしまったからだ。

旧住民のドイツ人達が帰還しているのかど



図7. シュチェチンの中央駅



図8. シュチェチンの光景

うかは分からなかった。ただ市電の中でドイツ人の老人たちのグループを見た。みんな 80 歳を超えた老人たちだ。おそらくシュテティーンで生まれ育った人たちが故郷を訪問していたのであろう。

シュチェチンの街は旧東独領と比較しても消費経済はあまり発展していない様だった。昼食を取ろうとしても良さそうな料理店は見つからずフランス系のホテルのレストランで食事をした次第だ。

小生がドイツ語を習い始めた 1960 年代には西独の地図は旧国境を表示していた。東独は 1950 年にオーデル・ナイセ線を国境として認めたが、西独は非承認の立場だったからだ。1969 年にブランド内閣が成立すると、西独は態度をかえて 1970 年 12 月 7 日にドイツ・ポーランド国交正常化条約が結ばれ、西独もオーデル・ナイセ線を国境として認めたのだ。それからでも 40 年以上が過ぎた。このオーデル・ナイセ線を越えてドイツが旧領を回復するのは非常に困難であろう。

#### 4) オーデル・ナイセ線 (フランクフルト・アン・デル・オーデル)

シュチェチンの後に訪問したのはフランクフルト・アン・デル・オーデルだ。航空輸送でドイツの中心になっているのはフランクフルト・アム・マインだ。アム・マインとはマイン河畔のという意味だ。アン・デル・オーデルとはオーデル河畔のという意味だ。この都市はオーデル川の両岸に発展した都市だが、オーデル・ナイセ線が独ポ国境になった結果、西岸だけがドイツ領として残り、東岸はポーランド領となった。

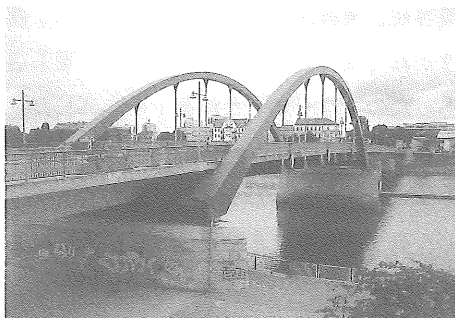


図9. 国境の橋、ポーランド側よりドイツ側を望む

フランクフルト・アン・デル・オーデルはベルリン防衛の第一線となり、ドイツ国防軍の要塞が建設されソ連赤軍との熾烈な戦闘が行われて、街は殆ど廃墟となった。

筆者がこの街を初めて訪問したのは、ドイツ統一直後の 1990 年であった。ベルリン東駅 (当時は中央駅との名称だった。) に行ってみると、撤退するソ連軍を輸送する列車で溢れていた。赤軍兵士に頼みフランクフルトまで便乗させて貰った。西のフランクフルトにはフランクフルター・ホーフと言う立派なホテルがあるが、東のフランクフルトにも同名のホテルがあったので、そこに宿泊した。た



図10. ドイツ領を示す看板

だし、中身は全く違っており、非常に貧相なホテルであった。ただ、窓の真下にはオーデル川が流れており、これが悪名高いオーデル・ナイセ線かとの感慨を持ったのを覚えている。

1990年に訪れたフランクフルトはかなり荒れ果てた国境の町であった。橋を渡ればポーランドで、橋の上で独ボの旅券審査と税関検査があった。西岸のドイツ領も東岸の旧ドイツ領 Dammvorstadt（ポーランド語では Slubice スウビツェ）も大差はなく、建物の維持管理がよく出来ていない荒れ果てた町であった。

今回の訪問では、欧州諸国の国境検査を廃止するシェンゲン協定の結果、国境検査は全廃されていて、橋を徒歩で、自転車、自動車でも自由に通行できる。1990年には87,000人だったフランクフルトの人口は現在60,000人を切っており三分の一の住民がフランクフルトを脱出して、主として旧西ドイツに移住している。この事実からするとフランクフルトはかなり荒廃している印象を受けるであろうが、流石に連邦政府より多額の援助を受けただけに街は小奇麗になり繁栄している様に見えた。フランクフルトで昼飯を食べた後に、橋を渡ってポーランド領に入った。

こちら側も1990年に比べると少しは良くなっていた。

ポーランド側に入ると両替商（ドイツはユーロ、ポーランドはズロチ）、給油所、理髪所、美容院、歯科医院で溢れていた。ドイツ側の住民は所得の低いポーランド側の安い料金に惹かれて橋を渡って来るのだろう。喫茶店があったのでコーヒーと洋菓子を注文した。意外にもドイツ語は余り通じず、英語でのコミュニケーションとなった。恐らくドイツへの反発がそうさせるのだろう。通貨は交換せず、クレジットカードで支払おうとしたが拒否され、ユーロの現金で払った。かなり安かった。お釣りもユーロで出てきた。



図11. ポーランド領を示す看板

ドイツ側では国際大学を設立しドイツ人若者とポーランド人の若者が一緒に学べる様になっている。若者同士が理解仕合い、オーデル・ナイセ線をめぐって再び戦火を交える事のない様にと祈念しているのであろう。

将来ドイツのナショナリズムが高揚する事があれば、オーデル・ナイセ線は世界の注目を集める場所となるだろう。死せるスターリンが後世に火種を残したのだ。



図12. ポーランド側の国境商店街入口

5) ベルリーナー・アンサンブル

ベルトルト・ブレヒトはドイツの偉大なる劇作家であり、詩人であり、演出家である。1928年に戯曲「三文オペラ」を執筆した。これにクルト・ヴァイルが曲をつけ、ベルリンのシッフバウアーダム劇場で初演され、大好評となり、世界各地で上演され、その音楽はジャズのスタンダード・ナンバーとなっている。

ブレヒトは左翼的であったので、ヒトラーが1933年に政権を掌握すると、直ちに海外に亡命した。第2次大戦後は東独に帰国し、「三文オペラ」を初演した、東ベルリンのシッフバウアーダム劇場を根拠地とする劇団「ベルリーナー・アンサンブル」を創設し、ブレヒトの作品等を上演してきた。この劇団は1956年にブレヒトが死亡した後も、1990年に東独が消滅した後も、多数の観客を集め繁栄を続けている。

現在ベルリーナー・アンサンブルの総監督はクラウス・パイマンと言う演出家である。パイマンは1937年にプレーメンで生まれたが、若い頃より、革新的な演出を行い、1986年にはドイツ語圏で最高の劇場と言われる、ウィーンのブルク劇場の総監督となった。彼の演出は非常に革新的であったので、保守的な人々の間には、いろいろと物議を醸したのであった。13年間ブルク劇場に務めた後、1999年にはベルリーナー・アンサンブルの総監督に就任したのである。

ベルリーナー・アンサンブルの今シーズンの初日は8月23日であった。演目は三文オペラである。筆者は1968年に日本で発売された2枚組のLPレコードを購入した事で、三文オペラを知る事になった。1972年にはベルリーナー・アンサンブルで本場の三文オペラを堪能する事ができた。以来、日本の国内外で色々な演出を見てきたのであった。それだけにパイマンの演出に期待を持って、ベルリーナー・アンサンブルを訪ねたのであった。

ベルリンに到着したのは8月18日であった。三文オペラの切符は既に売切れであったが、諦めきれずに前売事務所で何か切符を入手する方法はないかと尋ねた。するとキャンセル待ちをすれば、入手できる可能性があるとの事だった。開演前2時間前くらいから、当日券売場の横に行列が出来ていた。そこに並んだ者は開演15分前からキャンセル券を入手できるかもしれないとの事だった。筆者は舞台から4列目の席を入手できた。35ユーロとの事だっ



図13. 三文オペラの入場券

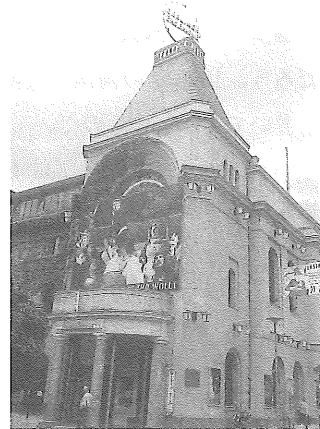


図14. ベルリーナー・アンサンブルの本拠、シッフバウアーダム劇場

た。念の為に、老人割引は無いのかと尋ねると、あるとの事であった。料金はわずか10ユーロだという。邦貨では1,300円くらいだ。正規で4,500円くらいだから、オペラに比べると演劇の切符はかなり安いのだが、その三分の一以下なのだから非常に驚いた。

三文オペラが始まると、筆者が見てきた様々な演出とは全く違う。衣装なども全員がほぼ同じ衣装を着ていた。筆者には誰が誰かは直ぐ分かったが、三文オペラのあらすじが分かっていない人々には、俳優たちの役割を理解するのにかなりの不便があったろう。筆者はパイマンの演出にかなり不満であった。幕間に前庭でパイマンに遭遇した。写真を撮らせてくれという、どうぞとの事だったので1枚撮影できた。しかし、議論を仕掛けるだけの勇氣はなかった。

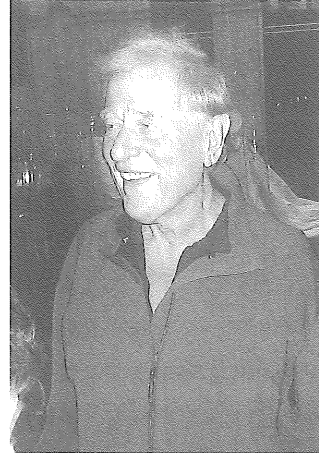


図15. パイマン総監督

#### 6) 中欧の縮図、ブラチスラバ

スロヴァキアの首都ブラチスラバは、中央の縮図と言って良いだろう。1993年にチェコ<sup>たもと</sup>と袂を分かち、チェコ・スロヴァキアから分離独立したのである。チェコ人とスロヴァキア人は同じスラヴ民族で、言葉も余りかわらないし、宗教もカトリック教徒が多いので、チェコスロヴァキアという一つの国に纏まっても良さそうなものなのに、何故分離独立せざるを得なかったのだろうか。

それは総人口の三分の二をチェコ人が占め、スロヴァキア人は三分の一しかないことで、常に少数派に留まる事に嫌気がさしたからであろう。チェコ人からすればチェコスロヴァキアと言う国名をチェコ・スロヴァキア連邦としスロヴァキア人の地位向上の為にずいぶん譲歩してきたのに、それでも文句を言うのなら勝手に独立してくれや、と言ったところだろう。1993年の両国の分離独立は一滴の血も流さぬ平和的なものだったから、世界史に於いても珍しいものだ。

ハプスブルク帝国はプロイセンに敗れた翌年の1867に帝国を再編し、ドイツ人が支配権を持つオーストリア帝国とハンガリー人が支配権を持つハンガリー王国の二重帝王国となり、ハプスブルク家の当主がオーストリア皇帝とハンガリー王を兼ねた。オーストリア政府とハンガリー政府は軍事・外交を統一していたのみで、他の政策はそれぞれ自由に行う事ができた。

チェコはオーストリア帝国に、スロヴァキアはハンガリー王国に属した。特にスロヴァキアはハンガリーに支配された歴史が長かった。ハンガリー本土がトルコに占領されていた17世紀には、現在スロヴァキアの首都であるブラチスラバがハンガリーの首都であった。



1918年に成立したチェコスロヴァキアも、20年後の1918年にはミュンヘン会議によりドイツ人居住地帯のズデーテンランドがドイツに割譲され、1939年にはチェコ側の残余のボヘミア・モラヴィアもドイツの保護領となる。それに対しスロヴァキアは独立する。スロヴァキアは枢軸国側について第二次世界大戦に参戦するが、1945年には枢軸国が敗北しスロヴァキアも消滅し、チェコスロヴァキアが再建される。スロヴァキアは1939年より1945年までは独立国であったのだ。1993年のスロヴァキア独立の背景にはこの事の一つの原因となった可能性はある。



図16. ブラチスラバの旧市街にある薬局の看板、ハンガリー語、スロヴァキア語、ドイツ語で書いてある。

スロヴァキアは2009年1月1日に欧州共通通貨ユーロも導入している。チェコは導入していないのに。2009年のユーロ導入直後スロヴァキアの首都ブラチスラバを訪問した事があった。本年は4年ぶりにブラチスラバを訪問した。中央駅から旧市街に向う路面電車は撤去されていた。それでバスに乗って訪問したのであるが、降りる場所が以前よりも遠いところにあり、若干不便になっていた。

夕刻には旧市街の道路上に出されたテーブルで食事をした。旧市街の賑わいは変わっていない。ただ、一見の客に対する商売はかなりすれたものとなっていた。筆者は中欧名物のグラシュを注文したが、給仕は品切れだと言い、値段が倍以上の料理を薦めてくれた。彼の提案をいれた。しばらくすると、北欧人のグループが来て、グラシュを注文すると同じ給仕が注文を受けている。横のテーブルにいて釈然としなかった。

## Mitteleuropäischer Sommer 2013

Hajimu WATANABE

*College of Science and Industrial Technology*

*Kurashiki University of Science and the Arts,*

*2640 Nishinoura, Tsurajima-cho, Kurashikishi, Okayama, 712-8505 Japan*

(Received October 1, 2013)

Im Mai 2013 erhielt ich die überraschende E-mail eines mir unbekanntem Absenders. Es stellte sich heraus, daß sie von einem in Manila stationierten österreichischen Diplomaten geschickt war, der vor kurzem ein Buch mit dem Titel „Österreichs Kriegsmarine in Fernost“ publiziert hat. In seinem Buch zitiert der Autor aus den Aufzeichnungen „Der Besuch des österreichischen Thronfolgers in Japan“. Mein Buch zu diesem Thema hatte er von Herrn Prof. Dr. Wladimir Aichelburg erhalten, was mich sehr erfreute.

Der Autor wünschte nun zu bestätigen, ob die Schlacht zwischen einem japanischen Flugzeug und den österreichischen sowie deutschen Kriegsschiffen am 5. und 6. September 1914 in Tsintau tatsächlich die erste See-Luftschlacht überhaupt in der Weltgeschichte gewesen sei. Zur Bestätigung gab er die Originalquellen der Auskünfte an und bat mich, dieses Material ausfindig zu machen.

Gerne nahm ich seine Bitte an und besuchte somit das Kriegsgeschichtsinstitut des Verteidigungsministeriums und die Reichstagsbibliothek. Es war mir möglich, wichtige Auskünfte für den Autor zu finden und sie ihm per Post und per E-mail zukommen zu lassen. Daraufhin kam es zu regem E-mailaustausch. In der Zwischenzeit war mir auch bekannt geworden, daß der Autor Botschafter Österreichs zu Manila war. Vorher war er Österreichs Botschafter zu Seoul gewesen. Außerdem hatte er an der Universität Tokio studierte.

Als meine Dienstreise nach Europa entschieden war, und ich erfahren hatte, daß der Autor, d.h. Herr Wilhelm Donko, im Sommer auch in Wien sein würde, schlug ich ihm unser erstes Treffen in Wien vor. Im September kam es dann zu unserer Begegnung im Wiener „Cafe Central“. Es war mir eine große Freude.